

Title	アンドレ・ジッドの『田園交響楽』の形成：<自然>と<芸術>の葛藤
Sub Title	Genèse de la Symphonie pastorale d'André Gide
Author	若林, 真(Wakabayashi, Shin)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.396(21)- 416(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0416

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アンドレ・ジッドの『田園交響楽』の形成

—— 〈自然〉 と 〈芸術〉 の葛藤 ——

若林 真

—

アンドレ・ジッド André Gide (1869~1951) の小説『田園交響楽』 La Symphonie Pastorale (1919) の最初の構想を作者が語ったのは、発表年から数えて26年前の1893年、地中海に面したツーロン港の近辺においてであった。それはいまや伝説と化している彼の最初のアフリカ旅行の途次であり、打ち明け相手は旅行の同行者で、アルザス学院時代の学友で画家のポール=アルベール・ローランス Paul-Albert Laurens である。その間の消息は自伝『一粒の麦もし死なずば』 Si le grain ne meurt (1920) にごく手短に、「明るる日をわれわれは、海辺にあるラティル家のすばらしい邸宅ラ・シミアージュで過ごした。ポールの記憶によれば、その邸宅でぼくはまた、後年『田園交響楽』となった主題を語ったとのことだ」⁽¹⁾と記録されているだけである。ジッドがどんな感懐を述べたのかその詳細はあきらかでない。しかし、『一粒の麦もし死なずば』の前後の叙述から推してある程度の見当はつく。これから渡ろうとする地中海のかなたのアフリカの大地を想いながら海を見つめつつ、弱冠23歳の青年の気分はさぞやたかぶっていたことだろう。彼は次のように述懐している。

「それまでぼくはキリストの道徳、すくなくともキリストの道徳であるとして教えられてきたある種のピュリタニズムを受け入れてきた。それに従おうと努めたあげくに、わが全存在の深刻な混乱を得たにすぎなかった。規律なしに生きることをぼくは承知しなかった。肉体の諸要求は精神の同意なしにすまずことができなかつた。(中略)とうとうぼくは、この不調和な二元論もひょっとしたらひとつの調和のなかへ解消されるかもしれない

と、漠然と考えるようになった。するとたちまち、この調和こそ、自分の至高の目的であり、それを獲得しようと努めることこそ、わが人生の手ざわりたしかな理由であるはずだと思えてきた。93年の10月にアルジェリア行きの船に乗船した際、それは新しい土地をとというよりは、〈それ〉を、金羊毛を、目指しての旅であり、ぼくは高揚した気分でその目標へと駆り立てられていたのである」⁽²⁾

当然、ジッドは戒律の宗教の否定、厳しい自己検証の否定、存在の調和と充足を求めて盲目的に生きなければならぬ必要などを、友人ポールに説いたはずである。そして、そのように説くジッドの脳裏に「もし盲目^{めしひ}なりしならば、罪なかりしならん、されど見ゆという汝らの罪は遺れり」(ヨハネ伝第9章41節)というイエスのことばがひしめいていたかもしれない。そうならば、まさしく後年の『田園交響楽』の一主題であろう。

ところで、アフリカで病を得たジッドは翌94年に帰国し、その年の8月にスイスへ向けて発ち、はじめはローザンヌに、つづいてヌーシャテルに足を留め、最終的にはフランスとの国境に近い寒村ラ・ブレヴィーヌで冬を過ごし、『パリュード』Paludes (1895) の制作にいそむことになる。「ラ・ブレヴィーヌは世にいう不快な僻村です。(中略) …ぼくはずいぶん前から夢のなかでラ・ブレヴィーヌで暮らしてきたのでした」⁽³⁾とジッドが母親に書き送ったこの僻地こそ、『田園交響楽』の舞台である。また、83～84年にかけて、この小説の思想的骨格の形成になんらかの寄与をしたと思われるゲーテ、イブセン、ビョルソンなどの作品にジッドは親しんでいるし、『田園交響楽』のなかで語られているディケンズ作品『炉端のおろぎ』The Cricket on the Hearth (1846) に親炙したのもこの頃である。しかも、このディケンズの小説は、貧しい玩具職人の父親が盲目の娘を安楽と富と幸福の幻想のなかに閉じこめて育てる物語であって、『田園交響楽』の筋を予告する趣があったことは注目に値する。つまり、『田園交響楽』は確実に1893～94年に胚胎したのだった。

しかし、作品は構想のまま長らく放置されていたらしく、ふたたび作品への言及があるのは約16年後の1910年5月30日の『日記』においてである。

「たぶんぼくはわが『盲人』⁽⁴⁾への序文を書くことになるだろう——さもないと、混乱が増すばかりだろうから。

ぼくはそのなかでこういうだろう、カトリックではなくてクリスチャンであることがプロテスタントであるのならば、ぼくはプロテスタントである。さりながら、ローマ正教いがいの正教を認めるわけにいかない。そして、カルヴァンのものであれルーテルのものであれ、プロテスタンティズムがその正教性をぼくに押しつけようとしたら、すぐさまぼくは唯一のものとしてローマ正教のほうへゆくだろう。〈プロテスタントの正教〉、こんなことはまったく無意味である。ぼくは〈権威〉を認めない、もしひとつだけを認めるとすれば、カトリック教会の権威であるだろう。

ところで、ぼくのキリスト教はキリストにのみ帰属している。カルヴァンや聖パウロを、キリストとぼくの間介在する不吉な2枚の遮蔽幕と、ぼくはみなしているのだ。ああ！もしもプロテスタンティズムがただちに聖パウロを放り出すことができたら！しかし、キリストではなくて聖パウロのほうに、カルヴァンはつながろうとしている。」⁽⁵⁾

ここに述べられているのは、まさしく『田園交響楽』の宗教的対立のドラマ、具体的には作中の牧師とその息子との宗教的葛藤である。1910年の時点において、小説の骨格はかなり固まっていたと推測されるのであるが、なぜか作者の重い腰は依然として上がらなかった。それにはいろいろな理由が想像される。小説の制作としては『法王庁の抜け穴』Les Caves du Vatican (1914)の完成が急がれていた。そして、この小説^{ソチ}の出版の年に第一次大戦が勃発する。ジッドはフランス・ベルギー協会の難民救済活動に参加する。とても『田園交響楽』の制作どころではなかったのだろう。

しかも、1917年には危機的ともいえる状況がジッドの家庭生活に生じている。それは12月のことで、戦場にいた親友アンリ・ゲオン Henri Ghéon からアンドレに差し出された書簡(13日付)をたまたま妻のマドレーヌ Madeleine が開封したのだった。それは一家の親友の安否を一刻も早く知りたいと願う彼女の、善意の行為でしかなかった。にもかかわらず、結果は深刻であった。妻は夫の同姓愛の実態を知ってしまったのである。ゲオ

ンの側からすれば意外な展開であったろう。カトリック教に改宗したゲオンは、友人にも改心を迫る熱意があまって、往年の旅行の同伴者の悪事をほのめかしてしまったのである。夫の同姓愛趣味には妻もうすうす感づいていたのだけれど、親友の書簡が確認の痛打となった。ジッド夫妻の生活にこうして大きな亀裂が生じることになる。それはまた、アンドレ・ジッドの宗教的危機に反響するものでもあった。『緑のノート』Cahier Vert と呼ばれ、後に『汝もまた…』Numquid et tu… (1922) の題名で刊行された日記体の随想録は、まさしくこの前後のジッドの宗教的葛藤の記録である。しかも、その多くが『田園交響楽』のなかに、あるいはそのまま、あるいはいくぶん言葉を変えて引用されているところを見ると、『汝もまた…』が『田園交響楽』を用意するものだったことは明らかである。

次に『田園交響楽』についての記述が見られるのは、1918年2月20日の『日記』でのことだ。

「4日前から例の『盲人』の物語に没頭している、これは長い歳月心に住みついていながら、執筆の望みを失っていた作品だ。下書きなしに物語をうまく運ぼうと努力している、そしてたちまち20枚くらい書いた。これを読み返したくないし、推敲はタイプに打つときにとどめたい。」⁽⁶⁾

つまり、1918年2月16日に『田園交響楽』の執筆はついに開始されたのである。そして、『日記』の朗らかな語調は注目に値する。実際にジッドの気持ちに春が来ていたようだ。その3日前の2月13日の『日記』を引用してみよう。

「冬はすでに終わったのだろうか？ 大気はなまあたたかい。蕾は希望にふくらんでいる。鳥たちは狂気している。そしてわが部屋の窓辺に小さな肉のきれはしをついばみに来る駒鳥は、ぼくが近寄ってももうおびえたりしない。

ぼくはエマニュエルが村の貧しい子供たちにスープを供するのを先ほど見た。パン配給券が子供たちに極端な食糧制限をするようになってから、ミューの空家へお昼ころになるとスープをもらいに来る。そうでもしなければ、どうして彼らの空腹が満たされようか。でも、そのおかげで彼らみ

んなが幸せで血色もよい。今朝は総勢17人で、食卓はかろうじて間に合うくらいであるが、明日は19人になるだろう。エマニュエルは食堂に火を燃やし食卓に花を置いた。」⁽⁷⁾

〈パン配給券〉などということばはいかにも戦時中の状況の厳しさを偲ばせるけれども、ここに叙述されたエマニュエル(ジッド夫人マドレーヌ)はまことにほのぼのとおだやかであるし、それを見つめる夫の視線にも屈託がない。それなのに、3月1日の『日記』には早くもかげりが見られるのだ。

「この4日間ひどい不眠に苦しんでいる。パリで気晴らしをした効験を2週間以上延長させることがまことにむずかしくなっている。

昨夜エマニュエルに『盲人』のはじめの45頁を読んで聞かせた。ああ！なんとかしてそこから抜け出したいものだ…」⁽⁸⁾

このふたつの『日記』の間に何があったのだろうか？ ちょうど両者にはさまれる形でゲオンへの憤慨が書き記されているところなどから推して、同姓愛の悩みがあったのかもしれない。3日後の3月4日の『日記』では苦渋はさらに色濃くなっている。

「またもや不眠、苦悩、苛立ち、けっきょくは自暴自棄…それも欲望が過剰だからというよりは決着をつけて眠りこみたいからだ…(中略)…ああ！Mのそばで味わうあの健康、あの幸せな均衡が欲しい。」⁽⁹⁾

Mとは何者であるかは後で考察するとして、もう少し『日記』の記述を追ってみよう。5月17日には第一部の完成が告げられる。

「ああ！すでに真夏だ。わが心は歓喜の大なる賛歌そのものである…この数日おおいに仕事にはげみ、『盲人』の第一部をほぼ完成した。」⁽¹⁰⁾

そして、『田園交響楽』という表題が書き記されるのは6月8日であって、年内に完成したい仕事の名称が列挙された後で、「最後に『田園交響楽』をぜひとも完成したい」⁽¹¹⁾とつけくわえられている。

二

『田園交響楽』第一部執筆時期の作者の『日記』に見えつ隠れつしてい

るMとは何者なのか？ 明から暗へ、暗から明へとめまぐるしくゆれうごく作者の心境の変化の鍵を握っていたのがMであるとおぼしいのだけれども、このイニシャルは『盲人』という原題名がはじめて『日記』にあらわれる1910年5月30日の約半月前に、早くも「昨夕Mを連れてピトを訪れる」⁽¹²⁾という記述に登場している。そして、このMが『田園交響楽』の主役に影を投じているのかもしれない。むしろ、モデル問題はどの作家のどの作品に関しても決して単純ではありえないだろう。作家は実在の人物から想を得て登場人物を造型するのが通例だとしても、所詮は作家に巣くう諸観念の複合的具象化にすぎないのだから。

しかし、何はともあれMのことは『田園交響楽』という小説の解明のひとつの鍵として、ここらで言及しておかなければなるまい。今日では疑問の余地のないことであるが、ジッドの『日記』のMはマルク・アレグレ Marc Allegret (1900～1973) である。父親のエリー・アレグレ Elie Allegret はカルヴァン派教会の牧師であり、アンドレ・ジッドの父ポールの死後、アンドレの後見役となり、ジッド夫妻の結婚式では花婿の付添い役を務め、後年、全フランス新教伝道団の団長となった人物である。こんな次第で、32歳も年下のマルクはジッドからすれば親戚の息子同然の存在であり、彼はこの聡明な少年の育成に多大な関心を寄せつつけていた。その保護者にもひとしい愛情がいつしか同姓愛者としての性愛に変質し変貌していったのである。そして、当時48歳の有名作家が16歳の無名少年に惑弱してしまったのだった。1917年のことである。

ジッドの少年愛の実態は今日ではよく知られているけれども、マルクは以前にジッドが熱を上げた少年たちとはかなり趣を異にしていた。一般にジッド好みの少年は健康美にあふれてはいても、知性や芸術的感性に欠ける野性的な男性、精神的価値が重視されない単なる肉欲の対象としての存在であった。マルクはそうしたタイプではなかった。眉目秀麗なのはむしろのこと、頭脳明晰であり、後年映画監督として『乙女の湖』や『パリジェンヌ』などで名をなしただけのことはあって、芸術的感性にも秀でていた。マルクにおいてはじめて、ジッドはひとりの少年に対する霊肉一致の

愛を体験したのであろうか。

『田園交響楽』の執筆開始時期はまさしくこの愛の高揚期にあたる。盲目の少女の教育に精励しているうちにいつしか慈悲心が性愛に変じていった牧師とジェルトリュードとの物語に、ジッドとマルクとのただならぬ関係が投影されなかったはずはない⁽¹³⁾。そして、夫のかような狂態がマドレーヌに気取られずにすむわけもなかった。ジェルトリュードへの夫の愛情を疎ましく思う妻のアメリカにマドレーヌの面影が見られるのも、これまた自然の成り行きというべきだろう。執筆期の『日記』に見られる<躁>から<鬱>へ<鬱>から<躁>へとゆれうごく作者の動揺は、マドレーヌとマルクの間にはさまれて一喜一憂する作者アンドレの実生活上の苦況の証左ではなかろうか？

ところで、ケオンの例の書簡いらい夫の男色趣味をはっきりと認識していたマドレーヌなのだけれども、今度ばかりは黙過できなかった。まず第一に、親しい有徳の聖職者アレグレ牧師の息子マルクを背徳の道連れにするなど言語道断の不埒であった。第二に、これまでの夫の少年愛には肉欲の発露しかなかったのだけれども、今回は確実に精神の愛が優位を占めており、それは夫が長きにわたって彼女の専有と保証しつづけてきた魂の愛を破壊しかねないものであった。この2点がマドレーヌの激昂の大きな理由だったのだらうと推測される。

マドレーヌの憂慮と憤激は『盲人』第一部がおおよそ書き上がった5月17日頃にはほぼ極点に達していただらう。しかし彼女は腹の虫を押さえに押さえていた。前述したとおり6月8日の『日記』には『田園交響楽』という題名がはじめて見られ、それを年内に書き終えたいと記しているけれども、5月17日以後ただちに第二部の執筆にとりかかったのかどうか、その点はつまびらかでない。かりに着手していたとしても、さしたる進捗はなかったと憶測される。なぜならば、『田園交響楽』の第二部の雰囲気は第一部と大きく変わり、その落差は以下に述べる事件の衝撃を抜きにしては考えにくいからである。しかも、ジッドの身边にはあわただしい動きがあって、とても創作活動どころではなかったらうという事情も斟酌せざるを

えない。したがって、作品は第一部の完成を見たまま、しばらく放置されていた可能性が強い。

ともあれ、ジッドのマルクへの恋情は日増しにつのり、夫妻で暮らすキュヴェルヴィルの館からの脱出の欲望は増大するばかりであった。こうしてマルク同伴のイギリス旅行が6月18日に決行されるのであるが、出発の前夜、マドレーヌは夫の目をじっとのぞきこんで、こう言い放った。

——ひとりでお発ちじゃないんでしょう？

——いや… と夫は口ごもる。

——マルクとお出かけなんでしょう？

——うんまあ…

もう後には引けぬ狂乱のジッドは、あたかも三くだり半でも突きつけるかのように、翌日の出発まぎわに一枚の紙きれを妻に渡した。そこには、自分はもうキュヴェルヴィルのきみのかたわらで暮らすことはできない。ここにいると〈腐って〉しまう。自分は生きなければならない、つまりここから脱出し、旅に出て、いろんな出会いをし、いろんな人びとを愛し、創造しなければならぬ、おおよそそんなことが走り書きされていた⁽¹⁵⁾。そして、日記には「いうにいわれぬ苦悩の状態で、フランスを去る。自分の全過去に永遠の別れを告げるような気がする…」⁽¹⁶⁾と記された。

三

マドレーヌの心にぐさりと突きささるこんな捨てぜりふを残し、そのことに自らも深く傷ついた旅立ちではあったが、マルク同伴のイギリス旅行の楽しさが日に日にジッドの憂悶を拭い去っていった。田園をマルクとサイクリングするジッドの心身に、新たな活力がみなぎってきた。そんな高揚した若やいだ気分にかけているところに、ひとつの出会いがあり、相手の側に意外な感情が芽生えたのである。その人は文芸批評家・伝記作家リットン・ストレイチー Lytton Strachey の姉で、フランスの画家シモン・ビュシイ Simon Bussy の夫人ドロシイ Drothy である。彼女のジッドとの初対面は英語教師としてであった。時に女性教師は52歳、男性生徒は50歳

に近かったが、程ならずこの初老の女性に恋の炎が点火され、やがてはジッ드의主要作品の英訳者ともなる。もちろん『田園交響楽』の英訳も例外ではない。省みれば両者の関係はドロシィの片思いに終始したとはいえ、ジッドからするとこのハッピーニングがイギリス旅行に微妙な味わいをそえたことは否めない。

たしかに、心身を爽快にし、忍び寄る老いの影を吹き払ってくれるイギリス旅行であったが、その楽しさに水を指す悪意のごとく激怒と嫉妬に燃えるマドレーヌの顔が、ジッドの脳裏に去来していなかったはずはない。だから、やがては帰らなければならぬキュヴェルヴィルの生活への危惧が、晴天の輝かしい太陽をときたま曇らせる暗雲さながらに彼の心を過らなかつたはずはない。

ジッドがキュヴェルヴィルのマドレーヌのもとへ舞い戻ったのは、秋色の濃い10月10日のことだった。一触即発の事態を半ば覚悟しての帰宅であったが、マドレーヌはそ知らぬ顔で夫を迎え入れた。こうして、何事もなかったかのように、ふたたびキュヴェルヴィルの夫婦生活が再開されたのである。ジッドはただちに『田園交響楽』の第二部の制作もしくは推敲に着手したが、仕事の進捗は難渋をきわめた。イギリス旅行を前にして仕事を中断した6月の彼と帰郷後の10月の時点での彼とでは、心境に多大な懸隔が生じていたからだろう。10月16日の『日記』にはこう記されている。

「昨日は一日中、かなりひどい頭痛に耐えた。さりながら、無理矢理に仕事に取り組んだ。仕事の再開がかくも困難と予感していたならば、たぶん、去る6月にあんなにあっさりと仕事を放り出しはしなかつただろう。とはいっても、あの頃のぼくに推理し、思考し、計算することなどできたろうか？… ぼくは抗いがたいひとつの宿命に前へ前へと駆り立てられていて、Mに再会するためならずすべてを犠牲に供しただろう。——彼のために何かを犠牲にしているなどとはつゆ知らずに。

今日のぼくには作中の牧師の精神状態にあらためて関心を持つのがこの上なく辛いし、そのために作品の結末が損なわれざるをえないのではないかと懸念している。(牧師の)想念をもういちど活気づけようとして、ふた

たび福音書とパスカルを取り出して見た。だが、ぼくは、熱狂状態を見つ
け直したいと願いながら、片方ではその虜になりたくないとも思っている。
手綱を引きながら鞭をあてているのだ。こんなことで碌なものが生まれる
わけがない。」⁽¹⁷⁾

3日後の10月19日には、以下のごとく記される。

「読書と仕事。あまりに速やかに『田園交響楽』の終結部に来てしまい、
いくぶん不安である。つまり、もうじき主題を掘りつくしてしまいそうなの
だ。作品のプロポジションとバランスからすれば、もっとひろがりのあ
る展開が許容されそうなのに… しかし、たぶんぼくの勘違いだろう。それ
に、やま場はまだいくらかふくらみそうである。」⁽¹⁸⁾

いったい作者の身邊と心中にどんなドラマが起っていたのだろうか。
前掲の日記から察するかぎり、作者は一刻も早く仕事にけりをつけたいと
願っているのは明らかである。そして、脱稿は約1月後の10月18日のこと
で、その旨が翌19日付のドロシィ・ビュシィあての書簡⁽¹⁹⁾に述べられている。

ところで、その2日後の11月21日にはジッドの生涯を画する大事件が起
きるのである。大事件とは？——当時のジッドは自伝『一粒の麦もし死な
ずば』の執筆中であった。ある日、過去の出来事の日付確認のために、往
年の自分が彼女に書き送った手紙を参照させてくれと頼んだ。マドレーヌ
が文机のなかに彼の手紙をすべて保存していたからである。彼女は意表を
ついて冷たく言い放った。「もうあなたの手紙はありません。わたしがぜん
ぶ焼いてしまいました。」

アンドレの頭上に鉄槌が下ったのである。その衝撃を彼は秘録『秘めら
れた日記』*Journal intime* (1947)⁽²⁰⁾に記し、後日、彼がもっとも信頼し
ていた後輩にして心友のロジェ・マルタン・デュ・ガール Roger Martin du
Gard も証言し⁽²¹⁾、さらにまたベルギー人の画家テオ・ヴァン・リセルベル
グ Théo Van Rysselberghe の夫人で、ジッドの文学的出発の当初からの心
友であり、小柄なことから la Petite Dame のニックネームで親しまれたマ
リア Maria も、龐大なジッド見聞録『ラ・プチット・ダームの手記』*Les*

Cahiers de la Petite Dame⁽²²⁾に記録している。さしあたり今は、ジッドの秘録から引用しておこう。

1918年11月21日

マドレーヌはぼくの手紙をことごとく破棄してしまった。つき先ほどの告白に、ぼくは打ちひしがれている。いうところによれば、ぼくがイギリスへ向けて出かけた直後に決行したとのことだ。ああ！マルク同伴の出発に、彼女が無残にも苦しんだのは、よくわかる。しかし、過去に意趣返しをしてどうなるというのだ？… ぼくの最良のものが消滅し、もはや最悪のものを補うことはないだろう。30年以上にわたり、ちょっとでも家を留守にすれば、毎日毎日、自分の最良のものを彼女に与えた（今なお与えている）。そんなぼくがいっきよに壊滅したのを感じる。もはや何をする気力もない。わけなく自殺だってできそうだ。…⁽²³⁾

11月24日

眠ろうとしてアスピリンをのむ。しかし、苦痛のあまり夜中に目がさめる。そして、気が狂うのではないかと思う。

—あれはわたしが持っていた世にも貴重なものでした、と彼女は言った…

—お出かけになったのち、あなたが打ち捨てたままのこの大きな家の中で、またもやひとりぼっちになりました、頼りになる人もなく、もはや何をしたらいいのかも、どうなるのかもわからず…死ぬより仕方がないのかな、とはじめは思いました。それほど、苦しんだのです…。何かをするために、あなたの手紙を焼きました。焼き滅ぼしてしまう前に、わたしは一通一通ぜんぶ読み直しました…⁽²⁴⁾

この精神の惨劇を知る由もないドロシィは、ちょうどそのころ悪性の流行性感冒に倒れていたマルクに触れて、呑気な手紙をジッドに書き送っている。

「かわいそうなマルク！ 病がそんなに重かったとは、胸が痛みますわ。彼が健康を回復してあなたのもとへ戻って来たというお便りを、心からお待ちしております。そして、わたしたちは間もなく当地であなた方にお目にかかれますわね。それを考えますと、ワクワクしますわ、そして、わたしたちみんながたいそうそれを喜んでおりますの。『田園交響楽』の結末部をお持ちになって、お見せくださいますわね、以前に書き出しのところをわたしに見せてくださったように？」(11月28日付書簡)⁽²⁵⁾

これらの言葉の後で、ジッドの手紙がなかなか手元にとどかなかったことの心配に触れ、あなたの身の上に「何かが起こったのではないか？」と彼女は不安を表明している。ジッドの返信は翌12月12日付であり、そこにはこんな謎めいた言葉が書き記されていた。

「…ひょっとして、もしもぼくが今あなたのそばにいたら、あなたの辛抱強い愛情に誘われて、最近わが生活を覆し、空のすべての輝きを奪ってしまった破局のことを、すこしは話す気になるでしょう。ぼくは今、心は千々に乱れ、足も腰も立たなくなっております。あなたが現在のぼくに再会なすっても、ケンブリッジでの伴侶の面影は見つからぬでしょう。あれから3週間が過ぎただけなのに！ そして生活はつづいておりますが、生きていくふりをしているだけの様な気がします…」⁽²⁶⁾

ここでジッドが仄めかしている〈破局〉とはマドレーヌの〈手紙焼却事件〉にほかならない、ドロシイは〈破局〉の実態を認識できぬままだけれども。

進退きわまっているジッドの苦況を、マリア・ヴァン・リセルベルグはさらになまなましく記録している。それは1919年1月10日から17日にかけての彼女の『手記』においてである。ジッドはこう語るのだった。

「…しかしようやく、ぼくは発狂をも自殺をも免れ、やっとすこしずつバランスと自分本来のものであるあの幸福の状態を取り戻した。

ぼくは今なおあれらの手紙の消失という事態を直視することができない。耐えるには、そのことを考えないようにしなければならない。さもないと、たちまち全生涯に中心軸がなくなるような気がする。申し分のない

浄福のさなかに、突然こんなことをひそかに思う人物にぼくは似ている、すなわち、おれは自己の幸福を他人の不幸の上に築いた、そして、阿呆のように、盲人のように、傍らにあった恐ろしい苦悩を何ひとつ見ず、何ひとつ推し量ることがなく、この盲目を利用してきた。おわかりだろう、こんなことを考えるのはほんとうにやりきれないってことが。彼女（マドレーヌ）が母親になりえたかもしれぬ、さらには肉体上の愛人にさえなりえたかもしれぬと考えるとき！ ぼくはおぞましい男だった。しかし、どうしようがあったらうか？ 彼女はこう言ったよ、〈もしわたしがカトリック教徒でしたら、修道院へ入るところですのに〉」⁽²⁷⁾

男色の問題を除けば、これは『田園交響楽』の主題そのものであり、ジッドの述懐はまさしく小説中の牧師のそれであり、マドレーヌの憤激と悲嘆は牧師の妻アメリーのそれにほかならぬ。特に、ここでの〈盲人〉とかく盲目〉という言葉の意味合いは注目に値する。とすると、ジッドが愛好してやまぬ、オスカー・ワイルドの有名な逆説⁽²⁸⁾どおりに、「自然が芸術を模倣した」のだろうか。

四

4

『田園交響楽』第一部の制作の当初から、作者の脳裏でヒロインのジェルトリュードにはマルクの相貌が影絵のように重なり合っていたはずであり、ジェルトリュードをめぐる愛情の三角関係にマルクをめぐる起こりうる家庭内の波乱の予想を作者は見ていたはずであるが、イギリス旅行前の彼にはまだ〈破局〉の予感はなかった。作品の進行はまさしく同名のベートンベンの交響楽第六番へ長調の第一楽章から第三楽章までのようにメロディは豊かでのびやかである。因みに、それぞれの楽章の題名を書き記せば、(1)「田園に着いたときのすがすがしい感じの目覚め」、(2)「小川のほとりの情景」、(3)「田舎の人々の楽しい集い」である。こうして、ジッドの『田園交響楽』第一部は次のような屈託のない文章で終わる。

「太陽は嚇々と光輝を放って沈もうとしていた。空気は生あたたかかった。私たちは腰をあげた。そして、話しながら、仄暗い帰路を辿った。」

ところが、イギリス旅行出発前夜のジッド夫妻の鞘当ては、ベートーヴ

エンの第四楽章「雷雨と嵐」の開幕の合図だったのである。まさしく小説の第二部は「雷雨と嵐」にほかならぬが、これには大音楽家の第五楽章「嵐の後の喜ばしい感謝に充ちた気持ち」はつづかない。帰国後の作品第二部制作時のジッドは、例のワイルドの逆説を噛みしめざるをえない心境であったろうから、一日一日の仕事に、現に自分のまわりで生起しつつある人生劇の批評的検証を重ね合わせずにはいられなかったことだろう。先に引用した10月16日の日記の、「この仕事の再開がかくも困難と予感していたなら、たぶん去る6月に、あんなにあっさりと仕事を放り出しはしなかっただろう」という言葉から察しがつくように、制作開始時の作者の予想では第二部の展開は現行版のようなものではなかったのであるまいか。それほど、第一部と第二部との間の落差は大きく、まるで別々の作品の部分であるかのようだ。木に竹を継ぐとはこのことである。第一部ののびやかさ、のどかさ に 比 して、第二部のうるおいのなさ、そっけなさ、ささくれだった感じはどうだろう！そして、草稿で見るかぎりでも、制作中の作者の精神状態の懸隔は瞭然としている。第一部は削除や書き込みの跡が比較的少なく、筆がなめらかに進行したのは明らかであるが、第二部に至ると俄然、削除、変更、書き込みなどが多くなっている。そして、同じく10月19日の日記の、「あまりに速やかに『田園交響楽』の終結部に来てしまい、いくぶん不安である。つまり、もうじき主題を掘りつくしてしまいそうなのだ」という言葉が物語っているように、速やかにこの小説にけりをつけたいと願う作者の焦慮が露骨なのだ。

『田園交響楽』は牧師の日記体の小説であり、189…年2月10日から5月30日までの記録であるが、第一部と第二部とのきわだった相違は、前者の叙述の力点が過去時の回想にあるのに対して、後者のそれは時々刻々に生起する現在時である。フィクションとはいえ、作者は日々新たに立ち表われてくる事態の重みを両足を踏ん張り辛うじて持ちこたえているかのようだ。〈芸術〉を追いかけ追いあげてくる〈自然〉の衝迫を、ひしひしと感じていたからだろう。

五

『田園交響楽』は脱稿されてから公表されるまでに紆余曲折があった。『N. R. F』誌 *La Nouvelles Revue Française* が大戦のため1914年8月号で休刊になり、いまだ復刊されていない時期でもあったために、はじめはアンナ・ド・ノアイユ Anna de Noailles の仲介により『ラ・ルヴュ・ド・ドゥ・モンド』誌 *La Revue des Deux Mondes* に推薦される。しかし、同誌の編集長ルネ・ドゥミック René Doumic は作品の〈宗教的性格〉ゆえに、同誌の読者層にそぐわないと判断して掲載をことわる。つづいて、この作品を『ラ・ルヴュ・ド・パリ』誌 *La Revue de Paris* に推挽したのは、ジャンヌ・ミュールフェルド Jeanne Mühlfeld である。かつて『ラ・ルヴュ・ブランシュ』誌 *La Revue Blanche* の編集次長であったリュシアン・ミュールフェルド Lucien Mühlfeld の夫人ジャンヌの友情のはからいにもかかわらず、ジッドの新作は編集長マルセル・プレヴォー Marcel Prévost の好むところとならなかった。知的大衆誌の感のある両雑誌への登場をジッドが望んだのは、読者層を〈知的前衛〉の枠からひろげたいというひそかな願いからであったろう。にもかかわらず、結局は両誌から拒まれた真因は、彼の〈背徳者〉たる〈悪名〉の禍であった。こうして最終的に、近く復刊される予定の因縁浅からぬ『N. R. F』誌に作品は掲載されることとなる。当初、同誌の復刊は5月号を予定していたが、6月号に延期され、ジッドの小説が実際に同誌に登場するのは、第一部が同年の10月号、第二部が11月号であった。しかし、マリア・ヴァン・リセルベルグの『手記』の記述⁽²⁹⁾等から推測するに、ジッドは雑誌発表前の折りあるごとに友人知人に作品を読んで聞かせ、意見を求めていたようである。

ある日マドレーヌはこんな感想を漏らした、「わたしが怖気をふるうのは、あなたがますます重要人物になっていくことなの」——すかさずアンドレは微苦笑しながらこう答える、「『田園交響楽』はそんなにひどくはないよ、だって、結婚と家庭の方向に向かっているもの…」——マドレーヌが言葉をつぐ、「そりゃそうね、けれど、だからこそ、この作品はさほど重要作でないのだと思うわ。もちろん、いちばん成功した作品のひとつでし

ようよ、でもね、他の人だって書けると思うのよ」⁽³⁰⁾

ジッドは『田園交響楽』、とくにその第二部に、マドレーヌへの贖罪の意図を込めたのである。しかし、彼女はその意図を正確には捉えそこなっているかのようだ。しかも、あれだけの煮え湯を吞まされながら、夫の獨創性は其の背徳者ぶりにあると主張するにひとしいマドレーヌの感想はまことにいたましい。ともあれ、作者の心境は、草稿に加筆訂正して印刷に回し、さらに校正刷りに朱を入れる段階で微妙にゆれうごいたようだ。一例として、作中の牧師の日記の日付の変更を見てみよう。

第二部の草稿の出発点は4月15日となっているのに、『N. R. F』誌掲載のプレ・オリジナル以来、4月25日に起点が変更され、草稿の5月11日の日付に至るまですべての項が10日後に順次ずらされている。一見してほとんど理由のないようなこの変更を作者はなぜ行ったのだろうか？ リヨン大学のクロード・マルタン教授 Claude Martin の推理はこうだ⁽³¹⁾。それは、草稿での5月9日の日付を5月19日に変更したかったためだろう、と推理するのである。プレ・オリジナル以降の版では、5月19日は牧師がはじめてジェルトリユードと唇を合わせた重大な日であり、しかも彼女の開眼が可能と判断した記念すべき日である。

5月19日 夜

ジェリユトリユードにまた会ったが、私は何も話さなかった。今夜、
ラ・グランジュ
〈納家〉のサロンには誰もいなかったの、彼女の部屋まで上って行った。ふたりきりになった。

私は長いこと彼女を抱き締めた。彼女は身を護るようなそぶりは何ひとつせず、顔を私の方にあげたとき、ふたりの唇は重なった…

これに、作者ジッドの1918年5月19日の『日記』の記述を対比してみよう。それは、イギリスへの出発を一月後にひかえ、マルクへの愛情が頂点に達した時期である。

5月19日

聖霊降臨祭。明日はパリに向けて発つ。野原は圧倒するような輝きを放っている。Mに再開。2日間をリモージュで過ごし、そこから幸福感に満ちあふれて戻ったところだ。ぼくは彼を待っている。(32)

クロード・マルタン教授が示唆せんとすることに重ねての説明は不要であろう。ほかにも日付けに不自然な箇所があるけれども、そこには作者の不注意もしくは筆のあせりが感知される。たとえば、5月21日の日記に、開眼手術にふれて「昨日ジェリュトリュードは、ローザンヌの医院に入院し、20日後に退院する予定だ」という記述があるのに、一週間も経たない5月27日の日記で、早くも手術が成功して「彼女は明日帰るはずだ」とあるのは、医学的に考えてもまるでつじつまが合わない。『N. R. F』誌で作品を読んだドロシィ・ビュシィは、牧師の日記の日付は不正確かつ無意味であるから、単行本にする際に訂正するようにと進言している(33)。そして、ジッド自身が校閲したはずの彼女の英訳本(34)では、ジェリュトリュードの入院期間に三週間が当てられ、5月27日、28日、29日、30日の原本の日付が、それぞれ6月8日、9日、10日、11日に改められている。それなのに、フランス語の原テキストのほうは現行の版に至るまで訂正がないのは、いかなる理由によるものだろうか？ 不可解というほかはないが、早く決着をつけたいと心はやる制作時の精神状態をそのまま記録しておきたいと作者が考えた、という推測が、あるいはもっとも妥当なところかもしれない。

この何ものかに急き立てられているような逼迫感と焦燥感とは、草稿から『N. R. F』誌掲載のプレ・オリジナルへ、さらにN. R. F. 社版の初版オリジナルへの推敲の過程にも明瞭に見てとることができる。一例をあげて見よう。第二部の末尾に近い5月29日の項、すなわち水に落ちたジェリュトリュードが、救出された病床で、小川へ足を滑らせた真相を牧師に告白する箇所である。

I B 草稿⁽³⁵⁾

〔Pasteur〕 Je vous ai menti ce matin,〔pardonnez-moi〕. Ce n'était pas pour cueillir des fleurs... (A)〔J'ai voulu...〕 Me pardonnerez-vous si je vous dis que j'ai voulu... (c)

〔牧師さま〕今朝は嘘をつきました,〔おゆるしてください〕。あれはお花を適むためじゃなかったのです... (A)〔わたしが望んだのは...〕おゆるしいただけますかしら,正直に申しあげれば,私が望んだのは... (c)

因に,角括弧のなかの文字は作者の削除の跡である。

II プレ・オリジナル

Je vous ai menti ce matin.Je ne cherchais pas à cueillir des fleurs... (B)

Me pardonnerez-vous si je vous dis que j'ai voulu me tuer ? (D)

今朝は嘘をつきました。わたしはお花を適もうとしていたのではないのです... (B) おゆるしいただけますかしら,正直に申しあげれば,わたしは自殺したかったのです。 (D)

III オリジナル

Je vous ai menti ce matin. Ce n'était pas pour cueillir des fleurs... (A)

Me pardonnerez-vous si je vous dis que j'ai voulu me tuer ? (D)

今朝は嘘をつきました。あれはお花を適むためじゃなかったのです... (A) おゆるしいただけますかしら,正直申しあげれば,わたしは自殺したかったのです。 (D)

前掲の三つの文章において,(A)は目的意識を明瞭にしている,(B)は目的意識を和らげている,(C)は目的をぼかしている,(D)は目的を鮮明にしている。そして,草稿は(A)と(C),プレ・オリジナルは(B)と(D)というふうに,目的をめぐる表現にそれぞれ濃淡をつけているが,オリジナルは(A)と(D)を用いて,一点の曖昧さもなく目的を鮮明にしている。

作者はなぜヒロインを自殺させなければならなかったのか？ もちろんそれは作品の芸術的、思想的次元の要請にもとづくものである。ジェリュトリュードの告白によれば、牧師の息子ジャックを愛するがゆえに、その彼に倣って新教を捨てカトリック教に改宗したとのことであるが、もしこれがほんとうなら、彼女はなぜカトリック教の大罪である自殺を試みたのだろうか？ これはジッド一流のアイロニーである。ここで勝利を博したのはカトリシズムではない、いわんやプロテスタンティズムではなおさら。作品の末尾の「私は泣きたかった。しかし、私の心は砂漠よりもかわいているようだった」と記す牧師は、ニヒリズムすれすれのところにまで来ている。そして、当時の作者の心境もそれに近かったと想像される。

今あえて作者の生活意識の次元に話を戻せば、アンドレ・ジッドはジェリュトリュードに自殺を試みさせることによって、〈手紙焼却事件〉の直後にはかなり強烈的な自殺の誘惑にかられたおのれの精神的危機の姿を描きたかったのかもしれない、併せてマルクの影をそれによって殺し、妻マドレーヌへの贖罪を図ったのかもしれない。もちろんこの推測にはなんの証拠も証言もないし、かりにそれが真実を穿っていたとしても、その真実は作者の意識下にひそむものでしかなかろう。にもかかわらず、あえてこうした推理を試みたのは、多くの芸術家は作品の創造のうちに実生活の鬱屈を乗り越え精神的カタルシスを企図するものだという、芸術心理学の通説もしくは俗説を思い浮かべてのことにほかならない。

<了>

注

- (1) Si le grain ne meurt (*in* André Gide: Journal 1939-1949, Souvenirs, Editions de la Pléiade) p.553——以下 le grain と略記する。
- (2) le grain pp.550-551
- (3) André Gide: Correspondance avec sa mère, Gallimard, pp.485-487. 1894年10月2日付。
- (4) 当初は La Symphonie pastorale 『田園交響楽』に l'Aveugle 『盲人』という題名が予定されていた。
- (5) André Gide: Journal 1889-1939, Editions de la Pléiade, p.300——以下 J. と略記する。

- (6) J. p.646.
- (7) J. pp.645-646.
- (8) J. p.648.
- (9) J. p.649.
- (10) J. p.654.
- (11) J. p.656.
- (12) J. p.299.
- (13) 当時のジッドは Maria Van Rysserberghe の娘 Élisabeth の教育にも大いに意を用いていたから、その影も幾分かは考慮する必要があるだろう。
- (14) Jean Schlumberger:Madeleine et André Gide, Gallimard, p.189——以下 M. A. と略記する。
- (15) M. A. p.190
- (16) J. p.656.
- (17) J. pp.658-659.
- (18) J. p.659.
- (19) Correspondance André Gide — Drothy Bussy I juin 1918- décembre 1924 (Cahiers André Gide 9),Gallimard, p.101——以下 C. G. B. と略記する。
- (20) André Gide: Et nunc manet in te, suivi de Journal intime, ldes et Calendes.——以下 J. I. と略記する。
- (21) M. A. pp.191-194.
- (22) Maria Van Rysselberghe:Les Cahiers de la Petite Dame 1918-1929 (Cahiers André Gide 4), Gallimard, pp.9-14.——以下 C. P. D. と略記する。
- (23) J. I. pp.78-79.
- (24) J. P. pp.80-81.
- (25) C. G. B. p.106.
- (26) C. G. B. pp.107-108.
- (27) C. P. D. p.10
- (28) Journal des faux-monnayeurs 『贋金つかいの日記』,Gallimard の1921年1月1日の項に、こんな言葉がある、「ぼくはワイルドの逆説に惚れ込んでいるのである。すなわち、自然は芸術を模倣する、そして、芸術家の規範は、自然が提出するものに甘んじないで、やがて自然が模倣できるし、模倣しなければならぬようなもの、それだけしか提出しないことである」p.29. また、次のような証言もある。「先に語った枝下ろしが始まったのはずっと後のことでしかない。すなわち、自分(マドレーヌ)をぼく(アンドレ)から切り離し、つづいて自分からぼくを切り離すという例の作業の

ことである。ぼくはそのことを『狭き門』のなかで長々と書いたけれど、一種の予見によって、後に現実が確認したものを前もって書いたのだ」(J. I. p.50)

(29) C. P. D. pp.16-19.

(30) C. P. D. p.16

(31) André Gide: La Symphonie pastorale, texte publié par Claude Martin (Paris lettres modernes Minard) pp.85-87.

(32) J. p.654.

(33) C. G. B. p.157.

(34) The Pastoral Symphony, Cassel & C°,1931.

(35) 現在までに発見保存されている草稿に3種類ある。(1)不完全原稿で、頁づけのない18枚の草稿〔クロード・マルタン教授はこれをB草稿と命名している〕。これは現行のガリマール社普及版のpp.90~132に相当し、作品全体の最後の3分の1に当たる。ジャック・ドゥーセ文庫所蔵。(2)完全原稿で、作者がB草稿に手を加えながらつくりあげたと推測される清書原稿で、頁づけのある145枚〔いわゆる草稿〕。ジャック・ドゥーセ文庫所蔵。(3)決定稿のコピーが54,55の番号入りで2枚残されている〔これがC草稿〕。カトリーヌ・ジッド文庫所蔵。C f. S. P. p.127.